

生まれ育つた茅葺き屋根の自宅を  
サロン「可喜庵」に

古民家で日本人の記憶を伝え、再発見につなげる

東京の私鉄・小田急線の新宿駅

から急行と普通列車を乗り継いで約40分、鶴川という駅に降り立つ。ここは白州次郎・正子夫妻の古民家「武相荘」があることで有名だが、実はもうひとつ、主に若手の美術家や音楽家が集う愛らしい古民家が存在することはあまり知られていない。その名は「可喜庵」。民家の持ち主の代々続いてきた古民家への愛着と新たな活用法を紹介する。



代々の古民家をサロンとして活用する鈴木亨さん

茅葺き屋根の家で  
家族がつながっている

可喜庵は、江戸末期に持ち主の鈴木亨さん（64歳）の曾祖父が隠居小屋として建てたもの。もともと「どこにでもあった材料を使い、名前も知らない職人が建てた、当時としては普通の家」だったという。以来、代々、増築や修繕を繰り返しながら住み続けてきた。関東大震災にも耐え、150年近くになる。6年ほど前までは、鈴木さん一家も普通に暮らしていた。

「高校時代に2か月ほど親戚の家に下宿したときと、大学卒業後イギリスで働いていた5年間を除けば、新しい住まいを建てるまではずっと、この家から離れたことはありませんでした。だから、思いついたというよりは、私にとっては今も、あたりまえの風景なのです」。この家は父の代で2回、自分で

2回、大きな改修をしている。お母さんは、家を建て替えた、2階建の家にしたたいとよく言っていたそう。だ。「私が結婚したときも、家を新しくしようという話が出ました。嫁さんとか、外から人が入ってくると、そういう動きが出ますね（笑）。それでも、床暖房など、少しずつ生活しやすいように工夫しながら暮らしてきました」。

古民家だからという不便さはそれほどないという。単純な構造で、基本的にオープンだから、どうにでも対応できる。逆に、一部屋ごとにドアがあつて仕切られている最近の家のほうが使い勝手が悪いのだそう。しかし、その家にもとうとう転機がやってきた。6年前、近くに新しい家を建てたとき、この古民



可喜庵。茅葺きの屋根が美しい

家をどうしようかということになった。父親に相談したら、返ってきたのは、「もう壊してもいいよ」という意外な答え。鈴木さんは、「たぶん、息子をこの家に縛りつけるのはかわいそうだと考えたのではないか」と思っている。

シニアライフアドバイザー  
松本すみ子

(有)アリア代表取締役、NPO法人シニアワークスRyoma21理事長。シニアライフアドバイザー、産業カウンセラー、キャリアコンサルタント。早稲田大学第一文学部卒業。IT業界に20数年勤務後、2000年に団体/シニア世代の動向研究とライフスタイル提案、市場コンサルティングを行うアリアを設立。講演・執筆など多数。著書に「地域デビュー指南術〜再び輝く団塊シニア〜」（東京法令出版）、「そうだったのか! 団塊マーケット」（経済法令研究会）など。